

## パリは燃えているか

これは、第二次世界大戦の最中にヒットラーが発した言葉です。パリ解放戦を象徴する言葉であり、映画や音楽の題名にもなっています。

1944年8月19日から25日にかけて、パリ解放をめぐるドイツ軍と連合軍などとの間で戦闘が行われました。この戦闘で連合軍側が勝利し、パリは4年ぶりに解放されます。

第二次世界大戦は、1939年9月ドイツ軍がポーランドに侵攻して始まり1945年5月まで6年にわたって、ヨーロッパ全土を焦土と化す戦いが繰り広げられました。当初は、ドイツ軍は電撃作戦などによって有利に戦争を進めていましたが、1944年6月連合軍によるノルマンディ上陸作戦の成功以降、ドイツ軍は次第に劣勢に立たされます。

こうした中、ナチス・ドイツのヒットラー総統は、8月9日、パリ防衛司令官にコルティッツ大将を任命し「パリは敵の手に渡ってはならぬ。パリを破壊し、最後の兵まで戦うよう」命令します。

コルティッツ大将は、パリ防衛司令官に任命されてから16日間にわたりパリの防衛戦を指揮しましたが、最後はパリ市内レジスタンスの指導者アンリ・ロル大佐に降伏しました。

結局、コルティッツ大将はヒットラー総統の命令を無視し、パリを死守することも、パリを破壊することもしませんでした。このため、彼は後年「パリを救った人物」と呼ばれるようになります。

私は、以前この話を聞いたとき、あの激しい戦争の最中にも、理性的に行動する人物がいたことに半ば感動したのですが、最近の研究では、コルティッツ大将には破壊命令を実行するだけの兵器を持っていなかったともいわれていますし、美しいパリを残すことを積極的に考えていたのか疑問の声もあります。ある種の保身が働いたのかも知れません。

彼は、ヒットラー総統の忠実な部下としてヨーロッパで戦ってきた軍人です。パリを焼き尽くせ、というヒットラーの狂気がコルティッツに無かったとはいきれません。パリが破壊されずに残ったのは、奇跡のようなものだったのではないかと感じられます。

狂気は、ヒットラーだけのものではありません。第二次世界大戦によって世界中にもたらされた悲劇は、その事を如実に物語っています。

美しいパリ、華やかなシャンゼリゼ通りからは、戦争の傷跡は微塵も感じられませんが、だからこそ、私たちは、人間の持っている狂気を片時も忘れてはならないのです。(塾頭 吉田 洋一)